

# 2022

# 龍谷大学 学生気候会議 提言書

共催：龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター (LORC)

龍谷大学学生気候会議実行委員会、OC's

後援：京都市、龍谷大学チャレンジ FOR SDG's

# 本提言書の構成

1. 本提言書の背景と目的	2
2 提言	
2.1 学生からの提言	
2.1.1 グループワークからの提言	3
2.1.2 意見集約からの提言	4
2.2 気候会議主催者（講師・教員）からの提言	5
3 学生へのアンケート調査（事前・事後）の分析	6
4 資料編	
4.1 会議の内容	7
4.2 会議の運営体制	9
4.3 ファシリテーション・グラフィック成果物	10
4.4 学生気候会議意見集約項目（全文）	10

# 1. 本提言書の背景と目的

コロナ禍の国際的な混乱が落ち着きを見せつつある中、改めて気候変動対策と脱炭素化へのコミットメントが求められている。本学も、創立400周年に合わせて、2039年までのゼロカーボン・ユニバーシティの実現を宣言し、京都市の脱炭素先行地域の取り組みにおいても、伏見エリアの主要アクターの1つとして参画するなど、地域の脱炭素化に向けて積極的な取り組みを展開し始めている。

龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター（LORC）と学生団体OC's（オックス）は、2022年12月に第2回龍谷大学学生気候会議を開催した。取り組みの参考にした「気候市民会議（climate assemblies）」は、気候変動に対する政策・事業の開発や実施の意思決定プロセスに市民の意思を反映させるためのツールで、欧州諸国を中心に国自治体レベルで実施されてきたものである。2021年度の第1回では、主目的を「学生自身の気候変動問題への理解の深化や主体性の涵養」に置いていたが、第2回では、より本来の意義である気候ガバナンスへの直接的関与を意識し、「ゼロカーボン・ユニバーシティの実現を宣言した大学の気候変動対策に学生目線での提言を行うこと」を主目的として設定した。

本提言書は、この第2回の学生気候会議において参加学生が議論し、提言として導出した内容を中心に、運営側であるLORC研究員によって編集され、同じく運営者のOC'sの学生たちとの調整の上でまとめられたものである。提言のソースは気候会議における次の4つのアウトプットである。

- ①気候会議における参加学生のグループワーク（6グループ）による提言
- ②気候会議終了後の、参加学生個人への意見集約（気候変動対策に関する27の質問）の分析結果
- ③参加学生への気候会議前後のアンケートの分析結果
- ④気候会議で講師をお願いした2名の専門家と運営者であるLORC研究員からの提言

今回の気候会議では、議論のための基礎情報として、専門家による気候変動問題の講演に加えて、本学のカーボン・フットプリントの数値や各種の脱炭素化へ向けた取り組みの情報も、参加学生に提供していたが、2日間という時間制約のため、学生からの提言にはデータなどによる論理的な説明に乏しいもの含まれている。それでも、日々地域で生活し地域と共に学ぶ学生の目線からのこれらの提言は、これから地域全体の脱炭素化の旗振り役となるべき本学の今後のコミットメントを考える上で、重要な示唆を提供してくれている。

第2回龍谷大学学生気候会議運営委員会一同

## 2 提言

### 2.1 学生からの提言

#### 2.1.1 グループワークからの提言

2日間の気候会議では、3つのテーマ「大学のハード面での脱炭素化」（食・エネルギー・建物・交通の4つのサブテーマを設定）、「人材育成における大学の役割」、「伏見エリアの脱炭素化における大学の役割」のそれぞれについて、はじめに専門家から各テーマについての講義を受けた後に70分から80分のグループによる議論セッションを行う、という形をとった。1グループあたり4、5名の参加学生とファシリテーター役のOC'sの学生1名、という構成で、6グループ（2日目は体調不良による欠席者が出たため5グループに再編）で議論を行った。ここでは、各グループの提言をテーマごとにまとめて紹介する。

#### テーマI「大学のハード面での脱炭素化」

##### 食

- ・地域のスーパーなどと協力したフードバンクの取り組みを検討する
- ・キャンパス内や生協におけるゴミの削減を図るとともにその活用（バイオマス発電、バイオ燃料など）を検討する
- ・ウォーターサーバーを学内に設置しマイボトルの推進を促すことで、ペットボトル消費の削減を目指す

##### エネルギー

- ・瀬田キャンパスにおけるソーラーシェアリングの導入を検討する
- ・学生・教職員・外部専門家による発電ベンチャーの設立を促進する
- ・自家発電を行い、その電気でEVスクールバスを運用する

##### 建物

- ・放置林対策として国産間伐材活用による省エネ建築物をキャンパスで採用する
- ・建築物の発注の基本方針として、サプライチェーンも含めた脱炭素化への貢献を設定する
- ・学生を巻き込んだ省エネ啓発キャンペーンを実施する

##### 交通（通勤・通学）

- ・学舎間大型バスのサイズと運行本数を見直すとともに、ポータルサイトでの事前予約による効率的な運行システムを検討する
- ・キャンパス周辺駅から大学までの「ラストワンマイルモビリティ」システム（利用でマイルが溜まり電子マネーに変換できるなど）を検討する

#### テーマII「人材育成における大学の役割」

##### 社会変革に導く人材の養成

- ・社会変革を主導できるような人材の養成方策を検討する
- ・脱炭素社会を担う人材として成長する学びや経験の機会を提供する

##### 課題解決に直結した学習機会の提供

- ・サマーセッションを活用して、学部横断型で「仏教SDGs」を学ぶ機会を提供する
- ・脱炭素社会についての「知識・技能・態度」のそれぞれに対応した講義・演習をより充実させる

##### 地域課題に寄り添った支援プログラムの提供

- ・学生のボランティア活動や地域活動のさらなる支援強化を行う
- ・大学施設を市民に開放して、研究実践交流を促進する
- ・リアルタイムに地域住民の悩みを解決するような、実践演習の導入を検討す

#### テーマIII「伏見エリアの脱炭素化における大学の役割」

##### 住民福祉

- ・自家用車の利用削減に貢献する市民向けコミュニティ・バスの運行を検討する
- ・子育て世代の伏見流出を防ぐための研究・実践活動を推進する

##### 環境教育

- ・各学部の強みを活かした観光客向けのエコツアーの開催を企画する
- ・伏見への帰属意識を高めるために、学生や教職員向けの街歩きイベントやフィールドワークを企画・実践する
- ・学生主体でZEH\*住宅を作るプロジェクトを立ち上げ、そのプロセスの中で伏見のリソースや特性を学び、地域の方々と連携した「地元学」をおこす

\*ZEH：net Zero Energy House（エネルギー収支をゼロ以下にする家）

- ・大学キャンパスを、環境に配慮した公園として地域に開放する

##### 主体間連携

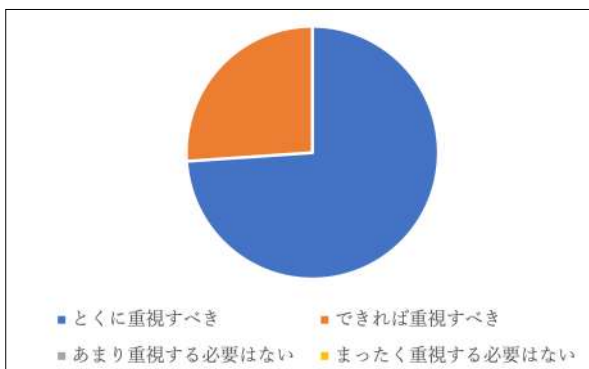
- ・地元企業、観光地、住民などの間に立って連携を促す「地域ハブ」としての役割を担う

### 2.1.2 意見集約からの提言

2日目の気候会議の最後に、参加学生には26の項目について、どの程度重視するかを尋ねた。また最後に自由記述で、カーボンニュートラル実現のための意見を伺った。回答者数23名である。

“二酸化炭素排出量を出来るだけ削減するために、再生可能エネルギー由来の電力を使用する”との設問に対しては1名を除く圧倒的に多数の学生たちが肯定的に回答した。

また、“大学の脱炭素化に向けた対策の推進のために、大学の気候ガバナンス（脱炭素化対策に関する意思決定）への学生の参画機会を拡充する”との問いかけには、17名が特に重視する、6名ができれば重視すると答え、否定的回答はゼロである。



さらに、“カーボン・ニュートラルの先進大学となるべく、最新技術を用いた施設・設備への積極的な投資を行う”との問いかけには、9名が特に重視すべきと答え、また11名はできれば重視すべきと答えた。他方、3名は重視しないと回答している。

“全ての学部において、脱炭素化を学ぶことができる科目やカリキュラムを増強する”との問いかけには、1名を除く全員が肯定的意見をよせ、14名は特に重視すると答えた。

学生たち自身の役割についても聞いた。“リーダーが進める取り組みを理解し、能動的に行動する「フォロワー」の育成”との問いかけには、11名が特に重視する、10名ができれば重視する、2名はあまり重視しないと答えた。これは“脱炭素社会を実現するための取り組みを先導する「リーダー」の育成”との問いかけへの回答とは大きく異なる。

っている。リーダー育成については、15名が肯定的意見、残りの8名が否定的回答を寄せている。

そして、“地域の脱炭素化をサポートする学生による社会貢献活動の企画・実践の促進とサポートの提供”との問いかけには、17名が特に重視する、6名ができれば重視する、と答え、否定的回答はゼロであった。

“京都の脱炭素化を進めるための、近隣大学との研究・教育連携の強化”との問いかけには、2名を除いて肯定的意見が寄せられた。

自由記述では、例えば次のような反応があった。「脱炭素を『できそう』と思ってもらうために、具体的な手段（企業の省エネなど）を提案したり、正しい情報（ある仕組みや商品などが本当に環境にやさしいのか等）を提供する人」になりたいとの願いを書いた学生もいた。別の学生は「龍谷大学がカーボン・ニュートラルに対して意欲的に取り組むことは重要であるが、本校だけが取り組んでも、地球全体では気候変動は収まらないので、他大学や企業にもカーボン・ニュートラルを達成できるように啓発する」と答えている。

以上のような学生たちの回答傾向から、学生たちが望む今後の龍谷大学の貢献のあり方が浮かび上がってきた。技術革新を必ずしも軽視しないが、龍谷大学は最新技術を他の大学に先駆けて率先して導入して日本を先導するという姿ではない。むしろそれよりも、地域との信頼関係のもとに地元の人々と協力して地域密着型活動を地道に展開し、多様な背景を持つ異なった学部や大学院の学生たちがそれらの活動に積極的に参加し、大学が地域と共にカーボンニュートラルの実現に向けて発展していくという姿である。

## 2.2 気候会議主催者（講師・教員）からの提言

大学が取り組むべき事項は以下の通りである。

### 食

- ・学食でのベジタリアン（ヴィーガン）メニューの強化

### エネルギー

- ・龍大ソーラーパークのような地域連携プロジェクトへのさらなる投資

### 建築物

- ・既存建築物のZEB\*化へ向けたロードマップと新築のZEB化方針の設定
- \*ZEB (Net Zero Energy Building) : 快適な室内環境を実現しながら、建物で消費する年間の一次エネルギーの収支をゼロにすることを目指した建築物

### 通勤・通学

- ・教職員向け駐車場へのEV充電器の設置
- ・学生むけ貸し出し用電気スクーター
- ・公用車のEV化および休日の地域住民・学生とのカーシェアリング

### 地域連携

- ・学生の参加によるこの分野での人材育成と、NPOなどへの将来的な人材供給への貢献

### 大学のコミットメントと組織・人材強化

- ・脱炭素化への強力なコミットメントと外部への情報発信
- ・気候ガバナンスを担う学内組織の強化
- ・気候ガバナンスへの学生の参画
- ・学生気候会議の恒常化
- ・外部の専門組織・ネットワークとの脱炭素化における積極的な連携：京都府温暖化防止活動推進センター、IGESなど
- ・脱炭素に向けた理解促進のためのワークショップ

運営側からの提言として、学生たちが望む姿に近づけるための鍵は2つある。

1つは気候会議に参加した学生たちが、今後とも気候会議のような機会を通じて、異なった学びに従事している他学部の学生や大学院生との時間をかけた意見交換の機会を持つことを切望している点である。そのような交流から脱炭素への道筋を描いていることの大切さが示されている。

もう1つは、リーダーとフォロワーの違いについての認識である。龍谷大学の学生たちは、リーダー像を決して否定するものではないが、他方大きな社会変革を起こすためにはトップのリーダーシップだけでは成功しないので、変革を後押しするフォロワーの存在が大切であるため、多くの学生たちがそのようなフォロワーになりたいと考えていることである。

それゆえに、**大学のガバナンスの仕組みと気候会議による熟議が効果的に連動すれば、龍谷大学がカーボンニュートラルを実態あるものにしていくには大きな前進となることが期待されるため、大学にはそのようなガバナンスのあり方を検討することを要望したい。**さらに、今回の学生気候会議からの提言の中には、学生生活にも密接に結びついている食、ゴミ、建物、学びのあり方、移動手段などについてかなり具体的な提言もあるため、それら個々の具体的提言の実現を大学が後押しをしていくことができれば、**学生たちの自主的な取り組み姿勢を一層高めることにつながる**であろう。そのような後押しの仕組みをガバナンス改革としても位置づけるよう提案したい。

### 3 学生へのアンケート調査（事前・事後）の分析

#### 参加学生の状況と学びについて

申込者は35名で、ポータル・チラシ等がきっかけとなった人が20名、無作為抽出メールがきっかけとなった学生が15名であった。

参加者の人数と所属学部は以下のとおりである。

#### 参加学生数：

29人（1日目）、25人（2日目）、  
うち全日程参加学生25人

#### 全日程参加学生の所属学部（人数）：

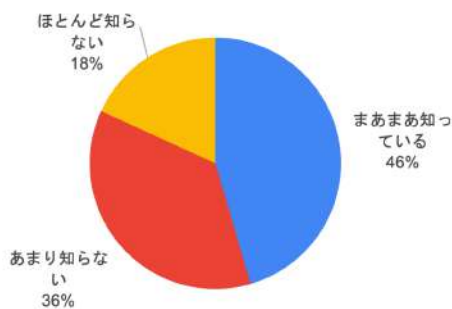
文学部（4）、法学部（3）、  
社会学部（1）、経済学部（1）、  
経営学部（1）、国際学部（2）、  
政策学部（8）、理工学部（1）、  
農学部（4）

#### 全日程参加学生の学年（人数）：

4回生（6）、3回生（5）、2回生（9）、  
1回生（5）

会議前のアンケートより（回答者22名）、気候変動に関して詳しい学生ばかりでないことがわかる。（まあまあ知っている 10名<46%>、あまり知らない 8名<36%>、ほとんど知らない 4名<18%>）**ほとんど全学部、全学年から参加し、気候変動に関する知識もさまざまで、参加理由も多様**であった（「何となく」～「気候変動に深く学びたい」）。気候会議は多様な意見を集約することが主目的であり、この目的にかなった参加者構成であると言える。

参加学生の気候変動問題に関する知識レベル（事前の自己評価による）



会議後のアンケートでは（回答者22名）、『2日間の感想』『特に印象に残った学び』『次年度もしたいか』『会議主催者へのメッセージ』について自由記述とした。

2日間の感想については、「楽しかった」「有意義」「勉強になった」「よかった」等、**全員が肯定的な感想**を持っていたことがわかった。また、学年や学部を越えたひとたちとの「話し合い」「議論」「ディスカッション」「グループワーク」により**多様な意見を知ることができたという感想が16名<73%>**から寄せられた。とりわけコロナ禍で**対面による対話**ができてうれしいという感想は、昨年度開催した1回目の龍谷大学気候会議でも多数聞かれた。また、「脱炭素の実現は自分に関わる身近な問題である」ことをあらためて認識したといった感想も複数みられた。

次年度も学生気候会議が開催されたら、「ぜひ参加したい」（16名<73%>）「参加してもよい」（6名<27%>）と**全員から参加する**という回答を得た。

特に印象に残った学びについては、気候会議のメインテーマである「脱炭素」「カーボンニュートラル」（6名）「京都市の取り組み」や「地域での取り組み」等を含め大学・地域連携での課題解決やつながりの重要性（6名）、学部や学年を越えたディスカッションで多様な意見を知ったり、チームで課題解決に取り組んだこと（6名）、「人材育成」（3名）「カードゲーム」（2名）と、会議デザインで学びのターゲットとしたキーワードがすべて言及されており、学びの場としても気候会議が非常に有効であったことがわかる。

会議主催者へのメッセージ欄には、参加者全員からねぎらいの言葉とていねいなお礼の言葉が綴られており、企画、広報、準備等主催者にとって大変な時間とエネルギーを要するが、参加学生から温かいメッセージをいただき、開催してよかったと思える2日間となった。

昨年度1回目を開催し、参加学生から自発的に学生団体OC's (Opportunities and Choices for Students) が立ち上がった。2回目の学生気候会議を通して、さらに学生の自発的な活動が発展することを祈念する。

## 資料編

### 4.1 会議の内容

#### 1日目のプログラム

- 9:15 開会、学長挨拶、来賓・講師紹介、ガイダンス
- 9:45 アイスブレイクを兼ねたカードゲーム進行：京都府地球温暖化防止活動推進センター事務局長 川手光春氏
- 13:30 基礎知識提供「気候変動とSDGs」齋藤文彦 国際学部教授
- 13:45 京都市「脱炭素先行地域について」京都市環境政策局地球温暖化対策室エネルギー政策部長 永田綾氏
- 14:00 龍谷大学「ゼロカーボンユニバーシティに向けた取り組み」深尾昌峰 副学長
- 14:15 テーマ1「大学のハード面での脱炭素化」気候ネットワーク上席研究員 豊田陽介先生
- 15:05 テーマ1に関するグループワークと全体への議論結果の共有、講師・教員からのコメント
- 17:00 閉会

入澤学長から学生気候会議への強い期待、激励の言葉をもって幕開けとなりました。

学部横断的で初顔合わせという状況のなか、緊張した雰囲気を和らげるアイスブレイクを兼ね、気候変動問題解決の難しさを体験するカードゲーム「2050カーボンニュートラル」を体験しました。政府、企業、NPOなどの立場でそれぞれの選択、行動がCO2排出にどう影響するのか、個別利益の追求が全体の利益と反する結果となることを実感し、どのような社会的仕組みが必要か考えました。

齋藤文彦教授から、気候危機の現状とSDGsとの関係、社会が目指すべき方向性について講演がありました。

京都市の永田氏から、環境省から選定を受けた脱炭素先行地域プログラムの紹介あり、そのなかで龍谷大学が「グリーン人材育成拠点」として位置づけられ伏見区の多様な主体との連携が期待されていることが説明されました。

深尾副学長から、龍谷大学創立400年となる2039年に向け、カーボンニュートラルユニバーシティを

目指す取り組みが紹介され、学生とともに一緒に考え、行動していきたい、という強いメッセージが送られました。

3氏の話題提供を受け、いよいよディスカッションのための課題設定に入りました。

気候ネットワークの豊田先生から龍谷大学のエネルギー消費、建物、通勤・通学、食などに関するデータを踏まえ、CO2の具体的な削減アプローチに関するヒントが提供されました。

昼食休憩をはさみ、エネルギー消費、建物、通勤・通学、食という観点から、大学としてできること、すべきことについて6グループに分かれて活発なディスカッションがなされました。

結果の共有では、フードロスの削減、キャンパス間をつなぐシャトルバスの運行方法の改善、瀬田キャンパスに隣接する里山「龍谷の森」の活用など、学生ならではの自由な視点から、具体的な提案が多数発表されました。





## 2日目のプログラム

- 9:30 1日目の振り返り、ガイダンス
- 9:35 テーマ2「人材育成における役割」  
京都府地球温暖化防止活動推進センター  
副センター長 木原浩貴先生
- 10:25 テーマ2に関するグループワークと全体への  
議論結果の共有、講師・教員からのコメン  
ト
- 13:15 テーマ3「伏見エリアの脱炭素化における大  
学の役割」  
京都市環境政策局地球温暖化対策室  
エネルギー企画係長 河合要子氏
- 13:45 テーマ3に関するグループワークと全体への  
議論結果の共有、講師・教員からのコメン  
ト
- 15:45 参加者の意見集約
- 16:30 チェックアウト、学長から修了証の交付式
- 17:00 閉会

2日目は2つ目のテーマ「人材育成における役割」についてディスカッションするための課題設定から始まりました。

京都府地球温暖化防止活動推進センターの木原先生から、日本人がなぜ気候変動に無関心なのか、リーダーとともにそれを支えるフォロワー人材の存在などについて説明があり、参加者自身の将来像とともに大学が人材育成に果たす役割について、この後のグループディスカッションで検討する課題が提示され、5グループに分かれて活発なディスカッションがなされました。

結果の共有では、コンソーシアム形式による環境についてディスカッションする機会や優れたアイデアへの表彰制度の創設、気候変動という課題を学生自身の生活に落とし込み、良い取り組みが学費や交通費へ反映するなどメリットの提示、双方向型の環境に関する講義やフィールドワークなど授業の充実、学部縦割り解消など、学生ならではの自由な視点から、具体的な提案が多数発表されました。

昼食休憩をはさみ、最後のテーマ「伏見エリアの脱炭素化における大学の役割」について検討するための情報提供として、京都市の河合氏から京都市脱炭素先行地域の対象とされる伏見エリアの特徴、計画、主体について説明があり、それを支える資源（エネルギー、人、資金）のうち、人材育成を担う

龍谷大学への期待が述べられました。これを受けて豊田先生から、伏見エリアで自分たち学生や大学として実現可能なプロジェクトの考え方について整理がなされ、グループディスカッションに入りました。

結果の共有では、様々な資源を活かしたZEH住宅づくりなどを通じた「ZEROカーボントウン伏見」の実現、様々なスキルを生かした学生観光ガイド、大学のハード資源を生かした地域への学習機会の提供、地域住民も乗れるシャトルバスによるマイカー削減などのアイデアが提案されました。

学生からの提案に対し、講師・教員からは、まだプランに盛り込まれてない地域資源が多く見つかった、2日間の学びを経て提案の質が高まった、など高い評価がなされました。

その後、参加者全員で車座になり各自一言感想を述べ合いました。学生にとっては気候変動問題とそれに対する大学の役割、自分たちの立ち位置や可能性について深く学ぶ機会になったとともに、この2日間での密な対話を通じて自分自身の気候変動問題の捉え方や価値観などの変容を実感できた、など意見が多く聞かれました。

最後に2日間の全日程参加した一人ひとりの学生へ、入澤学長から修了証が授与されました。



入澤学長は弊会の挨拶で、今回の自由な学びと議論の場である学生気候会議そのものが龍谷大学のめざす仏教SDGsの実践であること、学生が地域課題に真摯に取り組むことが大学と地域との信頼関係の深まりにつながっていること、キャンパスや学部の壁を超え一歩となって取り組みを進めていくことなど、熱いメッセージを送りました。

## 4.2 学生気候会議の運営体制

2回目となる今回は、昨年度参加した学生が中心となって立ち上がった学生団体OC'sと龍谷大学LORCが共同で企画から実施まで担った。

会議当日はOC'sから8人の学生ファシリテーターが参加し、グループディスカッションの円滑化、活発化に大きな役割を果たした。

また、学生ファシリテーターとしての姿勢・スキルを身につけるため、事前にファシリテーション研修を開催し、受講したメンバーのみ気候会議のファシリテーターを務めることとした。

### ファシリテーション研修

日時：10月30日（日）9：40～17：00

場所：深草キャンパス22号館305教室

講師：

伊藤圭之氏（一社アソボロジ―代表理事）  
山本恵果氏（合同会社カーニバルライフ副代表）  
村田和代（政策学部教授）

受講学生数：16人

受講学生の所属学部（人数）：

法学部（2）、政策学部（12）、  
経営学部（1）、国際学部（1）

受講学生の学年（人数）：

2回生（12）、3回生（1）、4回生（3）

### 《ファシリテーション研修プログラム》

9:30 開会、チェックイン

9:40 話し合い1 テーマ「おすすめの京都観光プラン」

3グループ（A,B,C）に分かれ、Aグループの話し合いをB,Cグループは観察する（フィッシュボール）

- ・Aグループ内で自己紹介
- ・話し合いのルールについてアイデア出し
- ・おすすめの観光スポットを各自付箋に記入
- ・アイデアの共有、KJ法による付箋の整理
- ・プランの考案
- ・結果発表

10:45 Aグループは「ファシリテート実践後ピア評価シート」に記入

B,Cグループは観察した結果メモをもとに時間軸に整理

11:40 講義「ファシリテーションとは」村田和代

12:00 休憩

13:00 ロールプレイ1 テーマ「オンライン・対面授業の提案」

14:05 「ファシリテート実践後ピア評価シート」に記入

14:15 ロールプレイ2 テーマ「ふるさと納税」

15:15 「ファシリテート実践後ピア評価シート」に記入

15:30 ロールプレイ3 テーマ「ファシリテーターにとって大切なこと3つ」

16:30 講師から講評

17:00 チェックアウト、終了

### 学生気候会議開催までのプロセス

日時：12月10日（土）9：15～16：35、

12月17日（土）9：15～17：00

場所：深草キャンパス22号館302教室

参加学生数：29人（1日目）、25人（2日目）

うち全日程参加学生25人

全日程参加学生の所属学部（人数）：

文学部（4）、法学部（3）、社会学部（1）、  
経済学部（1）、経営学部（1）、  
国際学部（2）、政策学部（8）、  
理工学部（1）、農学部（4）

全日程参加学生の学年（人数）：

4回生（6）、3回生（5）、2回生（9）、  
1回生（5）

### 《学生募集方法》

①全キャンパスでのポスター掲示

立て看板、各教務課の掲示板等にA0サイズ～B2サイズで掲示した。

②ちらしの配布

1000枚印刷し、全教員の個人ポストへの投函、教員を通じた授業等での配布を行った。

③学内ポータルサイト掲示板への掲載

全学部学生が閲覧する学内ポータルサイトの掲示板上に2回掲示を行った。

④メールでの募集案内送信

全学部学生（入学年度2019～2022年度）の学籍番号をもとに作成したメールアドレスの約20%、3896のメールアドレスへの一斉配信を行った。

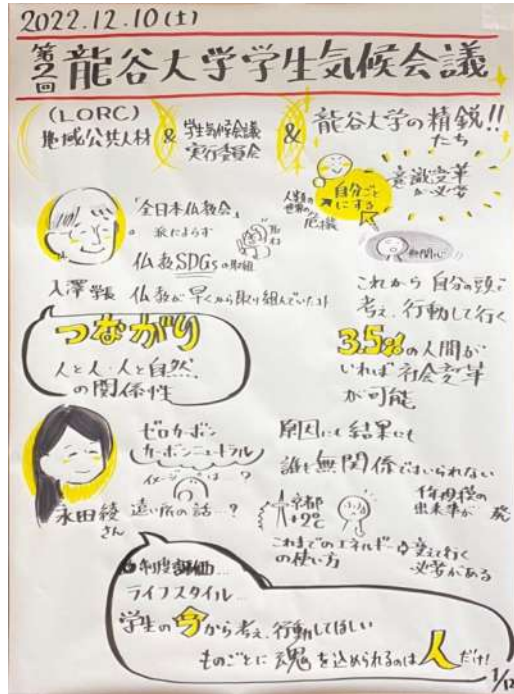
### 《参加者数》

一般参加、学生ファシリテーター合わせて25人が全日程参加し、入澤学長から修了証を手渡した。

#### 4.3 ファシリテーション・グラフィック成果物

1日目の講義、グループディスカッションの発表を、特定非営利活動法人グローバル人材開発センターの外崎佑実氏にお願いした。

成果物は下記QRコードから参照可能。



#### 4.4 学生気候会議意見集約項目（全文）

※各項目の選択肢は全て、「とくに重視すべき」、「できれば重視すべき」、「あまり重視する必要はない」、「まったく重視する必要はない」の4択にする。それぞれ、5点、3点、1点、0点で計算し全参加者の点数を足して優先順位が出るようにする（札幌方式）。

2030年（あるいは遅くとも大学の目標年である2039年）までの龍谷大学のカーボン・ニュートラル実現の目標に関して、以下の各項目について、皆さんが重視する度合いを選択して下さい。

大学の予算による制約があることも意識して、ご自身の中での優先順位を考えながら選択して下さい。

##### 1) 大学キャンパスの脱炭素化への取り組み

###### 1-1 建物の性能

新校舎の建設時には最新の省エネルギー建設技術を採用し、また既存校舎についても断熱改修などにより、キャンパス内の建築物の省エネルギー化を推進する

###### 1-2 再生可能エネルギーの活用

二酸化炭素排出量を出来るだけ削減するために、再生可能エネルギー由来の電力を使用する

###### 1-3 原発エネルギーの活用

二酸化炭素排出量を出来るだけ削減するために、原子力発電由来の電力を使用する（外部から購入する）

###### 1-4 エネルギーの調達

エネルギー源の脱炭素化に向けて、校舎屋上への太陽光パネルの設置や、学外での太陽光や風力など再生エネルギー施設の整備を進める

###### 1-5 移動手段の脱炭素化

大学で使用する学舎間バスに電動バスを導入する

###### 1-6 オンライン講義、リモートワークの促進

学生や教職員の移動を出来るだけ減らすために、オンライン講義・リモートワークの導入を積極的に進める

###### 1-7 キャンパス内のグリーンスペース

学生や教職員の環境意識を高めるために、キャンパス内のグリーンスペースを拡張する

###### 1-8 ゴミの分別・リサイクルの促進

エネルギーの無駄遣いやゴミ焼却による二酸化炭素排出の削減を目指して、キャンパス内のゴミの分別・リサイクルを促進する

###### 1-9 食品ロスへの対策

大量生産・大量消費社会からの脱却に向け、キャンパス内の食堂における食品ロスの低減対策を進める

## 1-10 地産地消の促進

フードマイレージを減らすために、キャンパス内食堂と協力して地産地消を意識した食材調達を進める

## 1-11 学生の能動的な役割

大学の脱炭素化に向けた対策の推進のために、大学の気候ガバナンス（脱炭素化対策に関する意思決定）への学生の参画機会を拡充する

## 1-12 教職員の能動的な役割

大学の脱炭素化に向けた対策の推進のために、大学の気候ガバナンス（脱炭素化対策に関する意思決定）への教職員の参画機会を拡充する

## 1-13 全国の大学に先駆けた脱炭素化の取り組み

カーボン・ニュートラルの先進大学となるべく、最新技術を用いた施設・設備への積極的な投資を行う

## 1-14 カーボン・ニュートラル実現の時期

現在のカーボン・ニュートラル宣言実現の期限（=2039年）を、できる限り前倒しする

## 2) 人材育成における役割

## 2-1 脱炭素化に関する科目、カリキュラムの強化

全ての学部において、脱炭素化を学ぶことができる科目やカリキュラムを増強する

## 2-2 高度専門人材を養成するための大学院の強化

脱炭素社会を実現するための即戦力となる高度な専門能力を有した人材を育成するために、大学院の強化を図る

## 2-3 大学が育成すべき人材（1）

脱炭素社会を実現するための取り組みを先導する「リーダー」の育成

## 2-4 大学が育成すべき人材（2）

リーダーが進める取り組みを理解し、能動的に行動する「フォロワー」の育成

## 2-5 大学が育成すべき人材（3）

脱炭素化の取り組みを担う利害関係者をつなぎ、成果を導き出す「コーディネーター」の育成

2-6 【自由記載】脱炭素社会への挑戦において、あなたはどのような人材になりたいですか

## 3) 伏見・深草エリアの脱炭素化における大学の役割

## 3-1 気候変動に関する地域住民向け講座の開催

地域住民や企業の方々の意識や実践を促すために、気候変動や脱炭素化を学ぶことができる講座を開催する

## 3-2 講義（ゼミ）や課外活動による学生の地域活動の促進

地域の脱炭素化をサポートする学生による社会貢献活動の企画・実践の促進とサポートの提供

## 3-3 社会人大学院生の積極的な受け入れ

地域の脱炭素化を進める専門人材育成を目的とした、地域の自治体や企業などからの社会人院生の積極的な受け入れ

## 3-4 地元企業や商店街などとの研究・プロジェクト連携

地元企業や商店街の脱炭素化プロジェクトを研究・実践両面からサポートする体制の構築

## 3-5 国や自治体との政策連携の強化

国の脱炭素戦略や自治体の政策・事業の実践を進めるための協力関係の強化

## 3-6 他大学との研究・教育連携の強化

京都の脱炭素化を進めるための、近隣大学との研究・教育連携の強化

## 4) 大学の脱炭素化に関する自由記載

龍谷大学や伏見・深草地区のカーボン・ニュートラルへの挑戦について、あなたが思うことを自由に記載下さい

## 4.5 意見集約項目（回答）単純集計結果

学生による回答を単純集計した結果は下記リンクから参照可能。

